慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『吉井勇全歌集』への道
Sub Title	
Author	田坂, 憲二(Tasaka, Kenji)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2016
Jtitle	三田國文 No.61 (2016. 12) ,p.50- 64
JaLC DOI	10.14991/002.20161200-0050
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20161200-0050

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『吉井勇全歌集』への道

田坂憲二

はじめに

本年（平成二十八年）一月、中公文庫の一冊として『吉井勇全歌集』が刊行された。昭和三十年に中央公論社から刊行された同名書籍を、吉井自身の「解題」「巻後小言」もそのまま付して、新たに細川光洋の詳細な「解説」「年譜」を加えて、約六十年ぶりの復刊である。吉井勇生誕百三十年にふさわしい出版である。

元版『全歌集』は、その五年後に長逝する吉井勇が、七十年の生涯、二万首を越える自作の短歌から精選した二四〇二首で構成されており、吉井の作歌活動の全体像が過不足なく把握出来るのみならず、晩年に吉井が自らの短歌をどう捉えていたのか、どう総括していたのかを知る上で、極めて重要な資料である。しかも、この自選歌集は、昭和三十年に短時間で一回的に編纂されたものではなく、十年近くの歳月をかけて少しずつ丹念に作り上げてきたものと考えるべきである。本稿では、言わば『全歌集』に向けての吉井勇の歩みを、具体的に跡づけることを目的とする。

一　『吉井勇全歌集』の構成

まず『吉井勇全歌集』の全体像を鳥瞰してみる。『全歌集』は、『酒ほがひ』『人間経』などの既刊歌集を基に編纂したもので、個々の歌集の初版刊行順に歌集を列挙し、それぞれの歌集から秀歌を選入したものである。

以下に、原歌集名、出版社名、出版年月、当該歌集所収短歌数、『全歌集』選入歌数[1]の順に列挙する。吉井勇の歌集は、長く愛好されたが為に、再版、三版と刊行されることがあり、その際装丁はもちろん、出版社が変わったり、再編集されて短歌の入れ替えがあったりすることもある。ただ、『全歌集』では、初版の刊行順に構成されており、各歌集の扉題の左下には初版刊行年時が記されており、吉井自身が『全歌集』「解題」で記述した歌数[2]も初版のものであるから、基準とする歌数としてこれを使用した。再版以降を視野に入れる必要性が強い場合は個別に後述する。

猶、次節以降の参考のために、歌集に通し番号を付している。

1 『酒ほがひ』昴発行所、明治四十三年九月　七一七首、一三六首
2 『昨日まで』籾山書店、大正二年六月　三一六首、八〇首
3 『祇園歌集』新潮社、大正四年十一月　二七五首、四九首
4 『黒髪集』千章館、大正五年四月　二九四首、三五首
5 『仇情』通一舎、大正五年四月　一八八首、二四首
6 『未練』阿蘭陀書房、大正五年五月　三一三首、三七首
7 『祇園双紙』新潮社、大正六年七月　二五七首、一〇首
8 『毒うつぎ』南光書院、大正七年五月　二一四首、二八首
9 『鸚鵡石』玄文社、大正七年十月　二五一首、一七首
10 『河原蓬』春陽堂、大正九年八月　三一〇首、二五首
11 『夜の心』プラトン社、大正十三年六月　五四七首、四四首
12 『悪の華』歌舞伎座出版部、昭和二年二月　四七三首、三一首
13 『鸚鵡杯』太白社、昭和五年四月　五三六首、三六首
14 『人間経』政経書院、昭和九年十月　六一〇首、二二八首
15 『天彦』甲鳥書林、昭和十四年十月　八六九首、三二九首
16 『風雪』八雲書林、昭和十五年十月　七六六首、七八首
17 『遠天』甲鳥書林、昭和十六年五月　七一三首、九九首
18 『朝影』墨水書房、昭和十八年一月　五七〇首、一二五首
19 『玄冬』創元社、昭和十九年三月　七五〇首、五九首
20 『短歌風土記大和の巻』創元社、昭和二十年十一月　五一〇首、一五四首
21 『故園』木原書店、昭和二十一年一月　四六七首、四六首
22 『寒行』養徳社、昭和二十一年十月　六八二首、一六〇首
23 『流離抄』創元社、昭和二十一年十二月　六一七首、一四九首
24 『短歌風土記山城の巻』創元社、昭和二十二年六月　四三九首、九六首
25 『残夢』創元社、昭和二十三年十二月　五一四首、三二六首

右の一覧で、『全歌集』が元の歌集からどれくらいの割合で短歌を選んでいるか、昭和三十年の段階での吉井の自己分析がどのようなものかが理解出来よう。直近の歌集である『残夢』だけが半数を超える短歌が採られていることは措いておくとしても、『人間経』や『天彦』など、今日でも特に評価される歌集の選歌率が高いのは、吉井自身も冷静に自己を見つめていた

ことの証左であろう。逆に自己評価の低いものについては、文庫版の解説で、細川が「歌集によっては入集率が一割にも満たないもの（『祇園双紙』『鸚鵡石』『河原蓬』『夜の心』『悪の華』『鸚鵡杯』『玄冬』）」もあると述べている。

この選歌率の低い作品には二つの傾向があると思われる。

一つは『酒ほがひ』『昨日まで』以降、『人間経』以前の、吉井が実人生においても、作歌活動においても、彷徨していた時期のものである。細川の指摘したものでは『祇園双紙』『鸚鵡石』『河原蓬』『夜の心』『悪の華』『鸚鵡杯』がこれに該当する。『祇園双紙』の前年、大正五年刊行の『黒髪集』『仇情』『未練』の三冊の選歌率もそれほど高くない。『鸚鵡石』や『悪の華』は芝居歌集という特殊な歌集であったことも、更に選歌率を低くすることに働いたかもしれない。

見逃せないのは『人間経』や『天彦』などを挟んで、『玄冬』に至り再度選歌率が低くなっていることである。これは時期的に、第一の傾向は当てはまらない。その原因を推測すれば以下のごとくである。

日中十五年戦争後半の時期になると、吉井も戦意高揚の歌を多く作るようになるが[3]、特に『玄冬』においては、その傾向が著しい。『玄冬』は「洛北雑詠」「続洛北雑詠」など八章に分類されるが、「続洛北雑詠」に続いて「聖戦抄」百余首が収載されている。「洛北雑詠」にも「十二月八日」十三首、「続洛北雑詠」にも「皇軍艦」七首が含まれている。こうした戦意高揚歌は、戦後吉井自身が否定したかったであろうことは、『玄冬』が昭和二十一年に同じ創元社から再刊されたときに、「聖戦抄」百余首をはじめこれらの短歌がことごとく削除され、別の短歌と差し替えられていることから、強く推測される。初版と再版本の『玄冬』は歌数自体は、七百首台でさほど大差はないのであるが[4]、収録作品は大きく異なっているのである。『全歌集』において『玄冬』の選歌率が低いのは、そうした負の記憶を有する時期の歌集であったからである[5]。これが第二の傾向である。ちなみに『全歌集』収載の『玄冬』歌の五首目は「しめやかに年を迎ふる爐のほとり百済観音思ひてわが居り」であるが、これは初版『玄冬』にはなく、戦後の再刊本で加えられた短歌である。

猶『故園』も四六七首中、『全歌集』に採録されたものは四六首で、厳密に言えば一割以下であるが、これは「作品の制作された年代から云えば、「夜の心」と「鸚鵡杯」の間、則ち大正十三年から昭和五年までの間に成ったもの」と吉井自身が言うように、詠作時期から言って、第一の傾向に準ずるものと断じて良かろう。

選歌率に相違はあるものの、『全歌集』は、既存の歌集の成立の順番に並んでいることが確認出来たのであるが、それでは、個々の歌集の中の短歌の排列はどうであろうか。これも基本的には、元の歌集の排列に従って並べられていると言うことができる。つまり、元の歌集の形態を残しながら、秀歌を抜き出すという形を取っているのである。たとえば、先ほど言及した『故園』を例に引いてみよう。『故園』は、「鴨東竹枝」、「羇旅三昧」等々の章題に別れ、その下がそれぞれ「宗達の幅」「蠟涙行」「夏すがた」「柳に寄す」「秋より冬へ」「京の春寒」、

「旅に出づ」「旅行く心」「筑紫の旅」「信濃路の旅」「佐渡路の旅」「浪華暦」「続浪華暦」「湯河原ぶみ」「旅を恋ふ」の小章題に分かれている。『全歌集』では、「鴨東竹枝」からは「宗達の幅」「蠟涙行」「夏すがた」の各編が、「羇旅三昧」からは「旅に出づ」「浪華暦」「続浪華暦」の各編が取られているが、すべて元本の順番通りに章題もその中の短歌も排列されている。これが原則であるが、一部で元本の歌集の構成を改めているものがある。このことは文庫版『全歌集』の「解説」の指摘するところで、次のように言う。

初期の歌集『酒ほがひ』『祇園歌集』などでは、章題をあらたにつけ直し、歌の並び順まで大きく組み換えている。その「新編集」とよんでもよい厳しい選歌の姿勢は、「自分の作品の真髄を伝えたものとして選んだ」という「巻後小言」の勇の言葉を裏づけるものであろう。

章の改変や改題、歌の排列を改めているという指摘は極めて重要である。ただ、「巻後小言」の吉井の言葉を額面通りに受け取るわけにはいかない。『全歌集』でこれらの作業がなされ、「新編集」であるとするのは、多少行き過ぎであろう。改変作業は『全歌集』以前に既になされているからである。詳しくは節を改めて述べる。

その前に、『全歌集』の文庫版と元版の関係について簡単に触れておく。結論を言えば、文庫版は元版をそのまま踏襲しており、元版の誤植と思われるものなども修正はされていない。たとえば第二歌集『昨日まで』からは多くの短歌が『全歌集』に採録され、原歌集の「郊外」「逃亡」「秋と冬」「夏」の順番にきちんと並んでいるのであるが、「夏」の章題が脱落して、この章題に属する短歌が「秋と冬」の章題の短歌にそのまま続いている。「夏来れば君が瞳に解きがたき謎のやうなる光さへ見ゆ」「たはれをとわれを罵る人多く夏もかなしくなりにけるかな」が「秋と冬」の短歌でないことは一目瞭然で、「夏来る」[6]の章題が落ちたためである。短歌本文も同じで、『全歌集』の「その夜をなほも思ひてかなしみぬその後みたび蘆の花ちる」は、初出の『酒ほがひ』でも全集でも、各種文庫本でも「その秋を」とあるのが正しく、元版の誤植を文庫版でも継承している。

二　岩波文庫『吉井勇歌集』

中央公論社の『吉井勇全歌集』が編纂される三年前、昭和二十七年に岩波文庫から『吉井勇歌集』が刊行されている。背にも表紙にも「吉井勇自選」と記される。人気のあった文庫本で、当初は毎年のように増刷され、その後もリクエスト復刊の対象になっている。

この岩波文庫は、『全歌集』と同様に、吉井勇の歌集をほぼ成立順に並べ、そこから秀歌を選集する形である。最大の相違は、大正四、五年頃の一部の歌集と、戦後の歌集のほとんどが入っていないことである。

岩波文庫『吉井勇歌集』の収載作品とその排列を『全歌集』の通し番号を付して示すと、1『酒ほがひ』、2『昨日まで』、3『祇園歌集』、7『祇園双紙』、8『毒うつぎ』、10『河原蓬』、11『夜の心』、13『鸚鵡杯』、14『人間経』、15『天彦』、

16『風雪』、17『遠天』、19『玄冬』、22『寒行』、以上十四歌集である。

収載されていない作品は、4『黒髪集』、5『仇情』、6『未練』、9『鸚鵡石』、12『悪の華』、18『朝影』、20『短歌風土記　大和の巻』、21『故園』、23『流離抄』24『短歌風土記　山城の巻』25『残夢』の十一歌集である。昭和二十三年十二月の刊行の『残夢』は、出版から日が浅いから岩波文庫に収録するのをためらった理由も分かるが、『寒行』を除いて戦後出版された歌集を含めていないことは、岩波文庫『吉井勇歌集』の大きな特色である。これら戦後の作品と時期の離れている『黒髪集』『仇情』『未練』の三歌集などが入っていないことは、また別の理由であると思われる。

また『全歌集』での通し番号は、厳密な刊行順であるから、岩波文庫の歌集の排列が、必ずしも成立の順番でないことがで見て取れよう。3『祇園歌集』と7『祇園双紙』が並んでいるのは、4『黒髪集』5『仇情』6『未練』を欠いているため繰り上がって繋がったとも見られるが、「祇園」歌集を並べたことの意味の方が大きかろう。(7)

さて、岩波文庫『吉井勇歌集』と中央公論社『吉井勇全歌集』に共通する十四の歌集を比較してみると、重要かつ明確な特色が看取される。それは、岩波文庫『吉井勇歌集』には採られたが、『全歌集』には収載されなかった短歌がある一方で、『全歌集』所収の短歌はすべてが岩波文庫には収載されているということである。ともに吉井勇の自選であるわけであるから、成立時期の早い岩波文庫を基にして取捨選択して作成されたのが『全歌集』であるという可能性があろう。

もうひとつ注目すべき点は、岩波文庫版『吉井勇歌集』と中央公論社版『吉井勇全歌集』とに共通する型があるということである。吉井の第一歌集である『酒ほがひ』は、「癡夢第一」「癡夢第二」「癡夢第三」「夏のおもひで」「酒ほがひ」「わかうど」「悪行」「後の恋」「PAN」「祇園冊子」「海の墓」「羇旅雑詠」「夢と死と」の章に分かれている。これが『全歌集』では「若き日の夢」「夏のおもひで」「酒ほがひ」「わかうど」「市井夜曲」「後の恋」「筑紫をとめ」「羇旅雑詠」となっている。従って、前節で見たごとく「初期の歌集『酒ほがひ』『祇園歌集』などでは、章題をあらたにつけ直し、歌の並び順まで大きく組み換えている」という指摘がなされていたのであった。ところが『全歌集』の排列と新しい章題は、すべてこの岩波文庫の段階で既に見ることが出来るのである。したがって、『全歌集』を「新編集」と呼ぶのは適切ではなかろう。では、この岩波文庫が「新編集」であるかと言えば、岩波文庫は更にさかのぼれる原型があるのである。そのことはまた別の要素を含んでくるので、後述することとし、ここでは、『全歌集』が岩波文庫を原型としている可能性を指摘するに止める。

いま、可能性という言葉を二度使用したが、ある資料を参看することによって、可能性を更に一歩進めて、岩波文庫を『全歌集』の原型そのものと断定することができる。

それは京都府立総合資料館(8)所蔵の吉井勇関係資料の中にある岩波文庫版『吉井勇歌集』である。同館には、吉井勇の資料が約五千点、岩波文庫『吉井勇歌集』だけでも九冊まで九冊すべ

てが所蔵されているが、そのうちの初版（文書番号三五二二）である。

この文庫初版には、ほぼ全ページにわたって鉛筆の書き入れがある。歌の頭に丸印や星印が付されているものがごくわずかと巻末解説の訂正箇所が数カ所、そして大量にあるのが、長い棒線で短歌そのものを削除するしるしである。

たとえば、岩波文庫『吉井勇歌集』には、第一歌集『酒ほがひ』の短歌が一五一首取られているが、そのうち一四首は、棒線で削除されている。第二歌集『昨日まで』も八九首中七首が棒線で消されている。そして削除されたこれらの短歌は、中央公論社版の『全歌集』には一首も採られていないのである。つまり、資料館所蔵初版岩波文庫は、吉井勇自身が『全歌集』を作成する際に、まず最初に資料としたものであると思われる。おそらく吉井は、この岩波文庫で第一次候補を選び、その後さらに絞り込んで『全歌集』に採用する短歌を選んだものと思われる。『酒ほがひ』には他に一首、『昨日まで』は他に二首、岩波文庫では棒線が引かれていないが、『全歌集』に再録されなかったものもあるからだ。『人間経』では、岩波文庫三〇七首から棒線で四五首消したあと、さらに三四首削除したらしく『全歌集』では二二八首となっている。『河原蓬』『夜の心』『鸚鵡石』などは棒線で消されたものはそれぞれ一首のみだが、『全歌集』ではそれ以外にも二首・五首・一〇首と削除されている。これは第二次作業で削除されたものの方が多い例である。このように二次的作業の存在はあるが、初版岩波文庫で、棒線や斜線で消された短歌は全四三五首、このうち『天彦』の「海越えて往なむか山に籠らむかとまれ肥前の長崎に来ぬ」のただ一首を除いて『全歌集』ではすべて消滅しているのである。その一致率は九九パーセントを超える。恐らく「海越えて」の短歌は二次作業で復活したのであろう。ただ一首であるから例外処理として良い。

また岩波文庫の『寒行』の「新春雑感」四首「夜深く」八首のように、一つの章題の短歌をすべて削除する場合は、章題を縦の棒線で消し、四首、八首の短歌は一本の斜線ですべての短歌にかかるように消している。その最大のものが『玄冬』巻末の「先達讃歌」一〇六首で、文庫の一ページ分を一本の斜線で、一二ページ分を大胆に消している。もちろん『全歌集』にはここから一首も取られていない。

このように、削除歌数や形式から考えて、岩波文庫が『全歌集』の基盤となったことはもはや間違いないことである。

関連して小さな問題にふれておく。資料館所蔵岩波文庫の初版本は、吉井の手沢本であるから、巻末解説の部分に、吉井自身とおぼしき手で誤植の修正がある。二五〇ページ「昭和十八年十月には、北白川から更に岡崎円勝寺町に移ったが、翌十九年二月には（中略）疎開をしたから、そこに住む事は僅かに五ヶ月」という部分、十九年に岡崎転居、二十年二月が疎開だから、それぞれ鉛筆で訂正書き込みがなされている。ただ、それは増刷の時に反映されなかったようで、一九九五年の一六刷でも初版時のままである。

三　二つの新潮文庫

岩波文庫『吉井勇歌集』の出版は、昭和二十七年七月であるが、実は同年五月にはまったく同じタイトルの『吉井勇歌集』を新潮文庫から刊行している。

前節の岩波文庫の記述に倣って、新潮文庫『吉井勇歌集』の収載作品とその排列を示すと、1『酒ほがひ』、2『昨日まで』、3『祇園歌集』、7『祇園双紙』、4『黒髪集』、5『仇情』、6『未練』、8『毒うつぎ』、10『河原蓬』、9『鸚鵡石』、12『悪の華』、11『夜の心』、13『鸚鵡杯』、14『人間経』、15『天彦』、19『玄冬』である。

概ね岩波文庫と骨格を同じくするが、特に注目すべき共通点は、3『祇園歌集』、7『祇園双紙』を並べていること、8『毒うつぎ』の次が10『河原蓬』、11『夜の心』の次が13『鸚鵡杯』の順番になっていることである。

相違点は、岩波文庫にはない4『黒髪集』、5『仇情』、6『未練』の大正五年刊行の三つの歌集を持っていること、同じく岩波文庫には採用されない9『鸚鵡石』、12『悪の華』の二つの芝居歌集を持っていること、岩波文庫にはある16『風雪』、17『遠天』、22『寒行』の三歌集を含まないことである。吉井勇の意識の中で、岩波文庫と新潮文庫と二つの『吉井勇歌集』をどのように棲み分けようとしたのか、どこまで自覚的であったか否かは不明であるが、結果的に、『人間経』以前の歌集を網羅して生涯の前半の仕事に手厚い新潮文庫と、昭和初期の三歌集や芝居歌集をはずし戦中期の歌集のほとんどを入れて、生涯の後半の仕事に比重を置いた岩波文庫となった。

収載歌集以外の相違は、岩波文庫は吉井自身の解説（一二ページ）があるのに対して、新潮文庫は佐藤春夫の全体解説と、各歌集の末尾に個別の吉井の解説（平均して二、三ページ）と形式を変えている。

それでは、新潮文庫と、後年の『全歌集』の関係はどうであろうか。以下検討する。

岩波文庫に収載されなかった二つの芝居歌集『鸚鵡石』と『悪の華』の例が分かりやすい。『鸚鵡石』は新潮文庫一八首の一首を除いたものが『全歌集』で、『夜の心』は新潮文庫も『全歌集』もまったく同じ歌四四首で、成立の早い新潮文庫が基準となった可能性がある。『黒髪集』以下の同時期の三歌集を見ると、その可能性は一層強くなる。『黒髪集』は新潮文庫四六首『全歌集』三五首、『仇情』は新潮文庫二八首『全歌集』二四首で、『全歌集』の短歌はすべて新潮文庫に含まれており、『新潮文庫』から取捨選択したものが『全歌集』という見通しが得られる。『未練』は新潮文庫三九首『全歌集』三七首である。新潮文庫の「深く恋へばいよいよ深くうたがはるはてなく君をうたがふも恋」が『全歌集』では「うたがへば蛇となるべき黒髪としも知らずして梳きたまふかな」の短歌と差し替えられている。これを除けば、『全歌集』の短歌はすべて新潮文庫に見られる。

排列にも新潮文庫と『全歌集』に共通項がある。初版や再版の『仇情』では「相思」「仇情」「秘事二三」「芝居情景」「恋がたき」「まぼろし」「湘南哀歌」の順番であったが、新潮文庫で

は「仇なさけ」「湘南哀歌」「相思」の三章のみが採られ排列も入れ替えられている。「なさけ」の平仮名表記も含めて『全歌集』はそのまま踏襲する。岩波文庫に収載されなかった歌集は、新潮文庫を基に『全歌集』が編纂されたと考えて良かろう。

それでは、新潮文庫と岩波文庫の両方に採られている歌集はどうであろうか。『酒ほがひ』一五一首『昨日まで』八九首のように、新潮文庫と岩波文庫が完全に一致する歌集がある一方で、相違するものもある。具体的に見てみよう。

吉井勇の初期の歌集のうち3『祇園歌集』、7『祇園双紙』、8『毒うつぎ』の三歌集は、岩波文庫と『全歌集』とでまったく変化がない。収載歌数も順に、四九首、一〇首、二八首で、絞り込まれた巻がある。この三歌集を新潮文庫で見てみると、『祇園歌集』、『祇園双紙』はやはり同じ歌数であるが、『毒うつぎ』は新潮文庫では二三首しかない。初二句で示せば、「人や見む比叡おろしや」「病みぬれば浪華のひとの」「たまきはる命ふたたび」「悲しければ星に向ひて」「何となればかなしき人を」の五首を欠く。岩波文庫と『全歌集』は共通してこの五首を持っているから、『毒うつぎ』に関しては新潮文庫と『全歌集』との関係は薄弱である。

新潮文庫と岩波文庫が共通して多数の短歌を選入している後期の歌集『天彦』で見れば、この傾向は一層鮮明となる。『天彦』には「羇旅三昧」という章があり、岩波文庫ではそこから「四国路の旅」四首「瀬戸の島々」四首「筑紫中国」六首「英彦山」三首「肥前長崎」三首「多良嶽」三首「阿蘇山」三首の短歌を採っており、『全歌集』はこれを完全に踏襲するが、新潮文庫はこの部分からは一首も選んでいない。次の「駿河路の歌」の章も、[9] 岩波文庫では「迷悟庵歌屑」十首「駿府新春」五首を採っている。『全歌集』はそこからさらに絞り込んで六首と三首にしているから、岩波文庫が基盤であることは間違いない。ここでも、新潮文庫はこの章自体を持たないから、『天彦』においても新潮文庫と『全歌集』の関係は極めて薄い。

結局、『毒うつぎ』も『天彦』も成立の早い新潮文庫が持っていない短歌を『全歌集』が持っているから、これらの歌集においては、新潮文庫から取捨選択して『全歌集』を作ることは不可能なのである。

以上の考察と、前節の結果を一つに繋げば、中央公論社版『吉井勇全歌集』は、1『酒ほがひ』2『昨日まで』以下の十四の歌集を岩波文庫『吉井勇歌集』を基に作成し、岩波文庫に採られなかった4『黒髪集』5『仇情』6『未練』と9『鸚鵡石』12『悪の華』の五歌集に限っては新潮文庫『吉井勇歌集』を基に作成した。かくして『全歌集』は岩波文庫『吉井勇歌集』を基準に骨格が形成され、それに新潮文庫『吉井勇歌集』の資料で補足して、大部分が成り立っていることが確認出来たのである。

ここで、もう少し新潮文庫について見ておきたい。

実は新潮文庫は、戦前既に吉井勇の自選歌集を出しているのである。この戦前版は『新選　吉井勇集』の書名で、昭和十五年九月に刊行されたものである（当時の新潮文庫の通編番号では第四五三編）。いわゆる新潮文庫の第三期にあたるものであ

る。第三期は戦時下の紙統制でA六判に縮小されるが、当該本の判型はまだ菊半截判で今日の文庫判よりやや大きい。[10]

この戦前版と戦後版、二つの吉井勇の歌集の関係はどうであろうか。もし戦後版が戦前版を継承しているとすれば、『全歌集』の源泉は更に遡ることが出来るからである。結論から言えば二つの新潮文庫のつながりはなさそうである。以下具体的に述べる。

戦前版の『新選　吉井勇集』に収載されている歌集は『酒ほがひ』『昨日まで』『毒うつぎ』『人間経』の四歌集のみである。戦後の新潮文庫でも、中央公論社『吉井勇全歌集』でも、『昨日まで』と『人間経』との間には十一の歌集を収録しているが、戦前版新潮文庫では、この時期の歌集は『毒うつぎ』のみなのである。岩波文庫『吉井勇歌集』の方はこの時期の歌集の取り扱いが軽かったが、それでも十一歌集のうち『祇園歌集』『祇園双紙』『河原蓬』『夜の心』『鸚鵡杯』と半分は採録している。新潮文庫戦前版の『新選　吉井勇集』は、この時期の歌集を採用しないという点で徹底しているのである。これは戦後に刊行された新潮文庫・岩波文庫・『全歌集』とは明確な相違である。解説類は、冒頭に自伝が一ページ、巻末に後記が一ページの簡略なもの。ただ後記に「私は自分の歌集の決定版を作るような気持で、この集に収めるべき作品を選んだ」とあり、四つの歌集に絞ったことは、昭和十五年当時の吉井勇の意識を反映していると言えよう。

四つの歌集で二百ページ余の一冊の文庫本を形成しているから、一つの歌集から採録された短歌は、戦後の新潮文庫に比してかなり多い。最も比較しやすい『毒うつぎ』で二つの新潮文庫を比べれば、戦前版が九五首、戦後版が二三首で、四倍以上の開きがある。戦前版では選歌されていた「海の嘆き」「山上独語」「写楽と河豚」「新佃閑居」「劇場小景」などは、戦後版ではすべての短歌が削除されている。猶、戦後版に残された二三首は、すべて戦前版の九五首の中に含まれている。

見逃してならないのは第一歌集『酒ほがひ』の短歌の排列である。戦前版では「癡夢第一」「癡夢第二」「癡夢第三」「夏のおもひで」「酒ほがひ」「わかうど」「悪行」「後の恋」「牧羊神（「PAN」の表記を改めている）」「祇園冊子」「海の墓」「羇旅雑詠」「夢と死と」と並び、初版の『酒ほがひ』の排列のままである。これに対して、中央公論社の『全歌集』も、その原型である岩波文庫版も「新編集」、戦後版新潮文庫も「新編集」の排列である。この新しい形は、昭和十五年の戦前版新潮文庫にはまだ見られず、これ以降であるということが確認出来る。

猶、戦前版で「吉井勇集」の上に「新選」とあることについても簡単にふれておこう。新潮文庫でこれ以前に吉井勇の自選集が編まれていることはない。ただ同じ新潮社から、〈現代自選歌集〉のシリーズの第四冊として『吉井勇歌集』が大正六年一月に刊行されている（使用したのは大正七年三月の第五刷）。菊半截判で上製函入り、冊子の背表紙と函の表の「吉井勇集」は自筆文字を使用、「羽二重表紙特製極美本（巻末目録）」という惹句で販売された。内容は、最新の歌集「未練」を巻頭に置き「黒髪集」「仇情」から「酒ほがひ」まで八作品を遡っていくというものである。おそらく、この新潮社刊の上製本の『吉

井勇歌集』に対して、戦前版新潮文庫では「新選」の文字を冠したものと思われる。

四　三つの『定本吉井勇歌集』

『吉井勇全歌集』はもちろん、岩波文庫にも先立つ資料として、『定本吉井勇歌集』という本がある。『吉井勇全集』には収録されていないが、第三巻の解題には木俣修によって言及がなされている。今、木俣の『吉井勇研究』[11]二六四・二六五頁の解題から重要な部分を引用してみよう。

昭和一八年一〇月、甲鳥書林刊。菊半截判。横綴本紙装。函入。本文二六五頁。（中略）昭和二二年八月二五日、奈良の養徳社から改訂版刊行。

簡にして要を得た書誌的記述であるがが、修正しなければならない点がある。

まず第一に、「昭和一八年一〇月、甲鳥書林刊」の『定本吉井勇歌集』は、菊判であること、上製カバー装であること、本文が二九三頁であることが最大の相違である。[12]これに対して、「昭和二二年八月二五日、奈良の養徳社から改訂版刊行」とある本の方が「横綴本紙装。函入。本文二六五頁」なのである。すなわち、木俣の記述は、改訂版の書誌が初版の書誌として記載されてしまっている。改訂版とまったく異なる初版の書誌は記載されていないのである。猶、改訂版の方も「菊半截判」ではなく菊判が正しい。掲出されている書影もまた昭和二十二年の横本である。

『吉井勇研究』は大変な労作で、吉井勇の伝記と書誌の基本文献とも言うべきものであり、初版と改訂版で造本が異なる場合には複数の書影を掲出する。しかし、この箇所では改訂版の書影のみであり、書誌も初版のものが欠落している。

さらにもう一つ追加しなければならないことがある。それは、実は改訂版には二種類あるということである。昭和二十二年の改訂版の前に、同じ養徳社から昭和二十年十月二十日にもう一つ、まったく別の改訂版が刊行されているのである。判型は四六判の並装で、菊判上製カバー装の昭和十八年の甲鳥書林版とも、横本函入りの二十二年版の改訂版とも、造本的にまったく異っている本である。

この昭和二十年版は、奥付には改訂版とあるが、内容的には十八年版とほとんど変わりがなく、ごく少数の文字や振り仮名を改めているだけである。なお、甲鳥書林は、戦時中の出版社統合で、天理時報社に吸収され養徳社となったから、昭和二十年養徳社版の発行者は、甲鳥書林創業者の中市弘である。戦後、中市弘は養徳社から離れたから、二十二年の養徳社版の発行者は岡島善次となっている。[13]ただ養徳社・岡島善次の名で出された本ではあるが、甲鳥書林の美しい本の代表作の一つ堀辰雄『晩夏』[14]を一回り大きくしたような魅力的な装丁である。時代が時代とて材料の限界はあるが、この時期としては可能な限り造本美を追究していると言って良かろう。

書誌的事項を確認したから、以下内容の検討に移る。

甲鳥書林版は、第一巻『酒ほがひ』、第二巻『昨日まで』、第三巻『祇園歌集』『祇園双紙』、第四巻『毒うつぎ』『河原蓬』、第五巻『鸚鵡石』『悪の華』、第六巻『夜の心』『鸚鵡杯』、第七

巻『人間経』、第八巻『天彦』、第九巻『風雪』という構成で、和本式に言えば、九巻一冊ということになる。これらは必ずしも刊行順ではなく、第三巻は祇園の歌集をまとめ、第六巻は芝居歌集をまとめている。この順番は、戦後の岩波文庫とも新潮文庫ともほとんど重なるのである。つまり、戦後踵を接して刊行された二つの『吉井勇歌集』の文庫版の原型は、この『定本吉井勇歌集』にあったのである。歌集の並びだけではない。『酒ほがひ』の新編集「若き日の夢」「夏のおもひで」「酒ほがひ」「わかうど」「市井夜曲」「後の恋」「筑紫をとめ」「羇旅雑詠」とする形も『定本』で初めて見出すことができる。この形こそが、戦後、岩波文庫や新潮文庫を経て、『吉井勇全歌集』に続くのである。その意味において、昭和十八年の『定本吉井勇歌集』は、昭和三十年の『吉井勇全歌集』の遙かな淵源ということができるのである。

甲鳥書林版の『定本吉井勇歌集』が、下っては『吉井勇全歌集』にまでつながると述べたが、それでは、それ以前に遡る原型はないのか。結論を述べると、これほど大部の、しかもバランスの取れた自選集はこれ以前には存在しない。上述した新潮社の『吉井勇歌集』も、昭和十五年の新潮文庫もまったく異なる形であった。大部のものとしては他に、第一書房の『短歌文学全集』吉井勇篇（昭和十二年）があるが、短歌（と散文）を十二か月に再分類し直したもので、形式をまったく異にする。刊行時期が近いものとしては河出書房『現代短歌』第四巻（昭和十五年）があるが、これは『人間経』『天彦』中心の小規模なものである。歌集の選択から排列まで『定本吉井勇歌集』が新たに確立した編纂方法であると断じて良かろう。

唯一、昭和十五年刊行の新潮文庫とは細いつながりがある。それは「自伝」と「後記」が一ページずつあるということである。これだけでは、つながりとも言い難いようであるが、『定本吉井勇歌集』の「自伝」は新潮文庫の本文をほぼそのまま使用し、末尾に二行追加しただけである。[15] 少なくとも「自伝」の部分は新潮文庫を基に作られていると言って良かろう。あるいは、文庫ゆえ紙幅の限界があった『新選　吉井勇集』の編纂が刺激となって、一層本格的な自選歌集を作ろうという思いが兆したのかもしれない。とすれば、戦前版の新潮文庫は、『定本吉井勇歌集』の発想に深部でつながっている可能性もある。また、激しくなる一方の戦争の影響もあろうか。そういった時代の中で、自分自身の歩みの跡をきちんとまとめておきたいという気持が生じたとしても不自然ではない。

幸いなことに吉井勇は戦争の時代を生き抜いて、戦後を迎える。そうして『定本吉井勇歌集』の改訂に取り組むこととなる。

次にその改訂版について見てみよう。戦時中の四六判の改訂版は、初版が品切れになったことによるのであろうか、内容的には菊判の初版とほとんど同じである。昭和二十年という時代が、判型の縮小と並製本への移行を強いたと言えよう。

本格的な改訂に取り組むのは、昭和二十一年のこと。この時作成された横本の改訂版は、初版とは大きな相違が見られる。それは、第四巻として『黒髪集』『仇情』『未練』を新たに立て、『毒うつぎ』『河原蓬』を第五巻に繰り下げ、以下一巻ずつ

ずらして、十巻一冊の構成にしたことである。この形になると戦後版新潮文庫との酷似性は一層強いものとなる（これに『玄冬』を加えれば排列は完全に新潮文庫と一致する）。横本の改訂版には「改訂版の後に」という一文があるがそこには「初版には全然割愛した三つの歌集を以て一巻を作り、これを創作の年次に従つて加へておいた」とある。ところが、この文章の力強さとは裏腹に、改訂版の『定本吉井勇歌集』で復活したこの三歌集は、後の岩波文庫では再度削除されているのは第二節で見たとおりである。吉井の改訂版の最大の狙いはこの三歌集の追加ではなかったと見るべきである。

そうすると、横本の改訂版では、初版にあった多くの短歌が削除されているという問題が浮上してくる。もともと一頁一〇首二九三頁の初版と、一頁六首二六五頁の横本改訂版では収載出来る歌数に歴然とした差がある。しかし、その差以上に削除された短歌の数は大きなものがある。たとえば、最も多くの短歌が削られている『風雪』は、初版四〇八首から二七〇首の短歌が削除されている。これだけ多くの短歌を削る以上、全体を貧相なものにしないためには、追加の歌集が必要である。『黒髪集』『仇情』『未練』の三歌集は、そうして復活したものではなかろうか。

もちろん『風雪』のようにどの歌集も大幅に削除されたわけではない。たとえば初版に四〇〇首近くあり、『風雪』と同程度の数の短歌が採られた『人間経』を比較対象に取り上げてみよう。『人間経』は初版三七三首に対して改訂版横本では三〇七首、その差は六六首で二割弱の短歌が削られているに過ぎない。『風雪』四〇九首から六割以上の短歌が削られたのとは大きく異なっている。これは昭和九年刊行の『人間経』と昭和十五年刊行の『風雪』との時代の差によるものであろう。『風雪』には戦意高揚の短歌が多く「愛国百首」をはじめ「聖戦頌」二九首「北支通信」八首「紀元節」六首「紀元二千六百年」七首などが含まれている。昭和二十一年九月あとがきの横本改訂版ではこれらはすべて削除されている。「改訂版の後に」の文章には、さらに「定本歌集を編んだ時は、四辺の状況から見て、採録することの出来なかつた歌も多くあつたし、又それと反対に、心ならずも採録することにした歌も多くあつた。それで今度改訂版を出すに際しては、思ひ切つた増補と刪除を加へ」とあり、戦時詠の削除こそ、改訂版の大きな狙いであっただろう。[16]

翻って、戦後の二種類の文庫や、中央公論社の『吉井勇全歌集』を見てみると、そこに収載されている短歌は、この横本改訂版に残されたものであることがわかる。従って、この昭和二十二年刊行の横本改訂版『定本吉井勇歌集』こそ、今日の中公文庫につながる『吉井勇全歌集』の直接の水源となったものと言えよう。

ところで、京都府立総合資料館には、三種類の『定本吉井勇歌集』がすべて所蔵されている。そのうち昭和二十二年の横本改訂版（文書番号三四九九）には、二節で述べた岩波文庫同様に鉛筆で削除された短歌が多く見られる。時期的に、昭和二十五年刊行の、岩波文庫か新潮文庫にむけての、基礎作業の跡と考えられる。結論を言えば、これは新潮文庫の下原稿となった

とおぼしい。

たとえば、第三節で述べた、岩波文庫と新潮文庫で相違のある『毒うつぎ』の五首がそうである。新潮文庫では二三首で、岩波文庫の二八首より五首少ないのであるが、「人や見む比叡おろしや」「病みぬれば浪華のひとの」「たまきはる命ふたたび」「悲しければ星に向ひて」「何となればかなしき人を」の五首すべて、資料館所蔵定本横本では棒線で削除されている。同じく第三節で述べた『天彦』の「羇旅三昧」の章、岩波文庫では「四国路の旅」四首「瀬戸の島々」四首「筑紫中国」六首「英彦山」三首「肥前長崎」三首「多良嶽」三首「阿蘇山」三首など多数の歌を選歌しているが、新潮文庫にはこの項目がなく、資料館所蔵定本横本ではこの部分、斜線で数ページにわたって削除の跡がある。

これまでに触れていない新潮文庫と岩波文庫で相違する例もあげておこう。定本横本の『天彦』「海南閑吟」の章の「籠居日々」には六首、「秋深く」には七首あるが、資料館所蔵本では、それぞれに二首ずつ削除棒線がある。これを岩波文庫で見ると、定本横本に所収の七首と六首はすべて継承されており、削除記号は反映されていないのである。一方、新潮文庫は五首と四首で、資料館所蔵本で削除している短歌は残しておらず、鉛筆の書き入れと見事に対応する。また新潮文庫に採用されなかった『風雪』は歌集名そのものを棒線で消し「以下削除」と記入している。資料館所蔵『定本吉井勇歌集』改訂版横本は、新潮文庫『吉井勇歌集』のまさに下原稿なのであった。

おわりに——全歌集への道——

以上見てきたように、『定本吉井勇歌集』は初版から改訂版へ、改訂版は戦後の新潮文庫や岩波文庫へ、その岩波文庫を基準に新潮文庫で補って『吉井勇全歌集』へと、吉井勇が倦むことなく自選歌集の編纂を進めてきたことが確認出来た。『吉井勇全歌集』は、昭和十八年の『定本吉井勇歌集』の初版以来、実に十二年の歳月を重ねて練り上げられた完成度の高い自選集であったのである。そしてその過程は理論上だけではなく、現存する編纂資料によって具体的に跡づけることが出来るのである。

それでは、岩波文庫などに収載されなかった戦後の作品、『吉井勇全歌集』において初めて自選集に収録されることになった歌集からは、どのようにして短歌が選ばれたのであろうか。『定本吉井勇歌集』や岩波文庫への書き入れから類推すれば、既存の刊本を基にして第一次の作業が行われたのではないだろうか。

幸いなことに、それを裏付ける資料も一部残されている。京都府立総合資料館所蔵『朝影』（墨水書房、昭和十八年五月第二版、文書番号三四七〇）『流離抄』（創元社、昭和二十一年十二月初版、文書番号三四九一）らがそれである。

岩波文庫は、既に自選の過程を経ているから、そこから更に削除するものに印を付ける形であった。『朝影』や『流離抄』は言わば第一次資料であるから、多少やり方が異なっている。まず一首も採用する予定のない章題は、その章題を棒線で消

す。それ以外の章題は、採用する予定の歌に丸印や二重丸印を付していく。短歌そのものを棒線で削除することはほとんどない。丸印を付けていく方法には、自身の短歌や歌集に対する、吉井の愛情のようなものさえ感じられる。削除するのではなく、原歌集から、掬い上げていくのである。選集である岩波文庫に対する態度とは自ずから異なるものがあろう。

もちろん、選抜は慎重になされ、丸印が付いていても、最終的にふるいにかけられたものもある。『朝影』の中核をなす「洛北籠居」の章はさらに「京の春寒」など十六に下位分類されるが、そのうち「夜天の雷」「愚庵和尚像」「硯に題す」「湯の銘」「藤を思ふ」「茶の本」「菅江真澄」の七つは棒線で消され、残った九つの小章題に属する歌のうち五四首に一旦丸印が付けられ、そのうち四首は消しゴムや×印で消去し、五〇首の丸印が残っている。そこから更に六首が削除されたものが、「洛北籠居」の章の短歌のうち『全歌集』に残った四四首である。もちろん『全歌集』収載歌はすべて『朝影』に丸印の付いているものである。このような作業を繰り返して『吉井勇全歌集』が誕生したのである。

作家が編纂した自選集の重要性は言うまでもないことだが、我々はどのような作品が残されたのか、その結果のみに目を奪われがちである。しかし一旦自ら生み出した作品に自分自身で合否を付けていく、その厳しい姿勢も直視すべきであろう。作者自身が最も厳しい読者なのである。吉井勇の場合は、幸いなことに、多くの作業過程の資料が残されている。それらを丹念に読み解いて行くとき、自身の作品と厳しく対峙する吉井勇の横顔を確かに見出すことが出来るのである。

注

（1）原歌集の段階で重複して取られている短歌は、どちらか一方でしかカウントしないために『全歌集』選入歌数は多少変化する。吉井勇の代表歌「かにかくに祇園は恋し寝るときも枕の下を水のながるる」は、周知のように第一歌集『酒ほがひ』所収であるが、『祇園歌集』にも再録されている。『全歌集』では『祇園歌集』の一首として出ている。したがって『酒ほがひ』はこの歌をカウントするに至らない。「香煎の匂ひしづかにただよへる祇園はかなしひとり歩めば」「ゆゑ知らず涙ながれぬ閉されし歌舞練場のまへを通れば」など、いずれも『酒ほがひ』ではなく『祇園歌集』から採られている。

（2）『夜の心』以外はすべて歌数表記がある。

（3）もちろん吉井勇一人のことではない。たとえば八雲書店は〈決戦歌集〉として歌人を糾合し、斎藤茂吉にはそれに呼応した戦争歌集『萬軍』がある（秋葉四郎『茂吉　幻の歌集『萬軍』　戦争と斎藤茂吉』岩波書店、二〇一二年）。この問題について別稿「吉井勇と川田順―昭和二十年前後の書簡を中心に―」を準備している。

（4）このことに関しては、木俣修が『吉井勇全集』第三巻の解題で詳細に検討している。

（5）次節で述べる岩波文庫版の段階よりも、急激に『玄冬』からの選歌率が低くなるのは、それだけ負の記憶が強くなったと言えようか。

（6）『昨日まで』原本では「夏」、戦前版新潮文庫まで同じ。『定本吉井勇歌集』以降「夏来る」の章題。新潮文庫や『定本』については三節四節参照。

（7）後述する『定本吉井勇歌集』横本改訂版では、3『祇園歌集』7『祇園双紙』4『黒髪集』5『仇情』6『未練』の順番である。

（8）二〇一七年春より京都府立京都学・歴彩館と名称変更予定、本稿

執筆時の名称で記述する。

(9) 岩波文庫は「駿河路の歌」のポイントが小さく印刷の位置も低いため、「迷悟庵歌屑」「駿府新春」と同格に見えるが、「駿河路の歌」の下位分類が「迷悟庵歌屑」「駿府新春」である。

(10) 本年（二〇一六年）角館（仙北市）の新潮社記念文学館では「新潮文庫のひみつ展」が開催された。百年を超えた新潮文庫の歴史が鳥瞰出来る充実した展示であった。

(11) 番町書房、一九七八年。『吉井勇研究』の前身である『吉井勇人と文学』（明治書院、一九六五年）も同文である。

(12) 装丁は高村光太郎、小杉放庵の口絵がある。

(13) 甲鳥書林と養徳社との関係については小田光雄『古本探究Ⅱ』（論創社、二〇〇九年）が簡潔にまとめている。

(14) 林哲夫『古本デッサン帳』（青弓社、二〇〇一年）は『晩夏』を入口として甲鳥書林本の総目録を試みた力作。

(15) ただし倉卒の間になされた作業であったか、新潮文庫の文章を引き継ぎながら「明治四十三年新詩社に加盟（新潮文庫の三十八年が正しい）」とあったり、追加の二行の中に「（昭和）十二年秋京都北白川に移り（十三年が正しい）」などと、年時の誤りが散見する。

(16) 『定本吉井勇歌集』の「改訂版の後に」の日付は昭和二十一年九月、刊行は二十二年八月。この中間の昭和二十一年十二月刊行の歌集『流離抄』においては、短歌そのものが初出の形から「たたかひ」など戦時色の強い表現が周到に訂正されている。田坂「本を紡ぐ人々―吉井勇『流離抄』を中心に―」『文学・語学』二一九号、二〇一七年一月刊行予定。

（附記）
個々の歌集や、各種文庫、全歌集等、活字資料からの引用に際しては、仮名づかいはそのままとして、振り仮名のたぐいは省略した。また漢字は原則として新漢字に統一した。
資料の閲覧にご高配を賜った京都府立総合資料館に深謝申し上げる。特に様々のご教示を賜った京都府立総合資料館の土橋誠氏に心より厚く御礼申し上げます。

（たさか・けんじ）